

人生初の一人旅

リクルート=スタディサプリ講師 村山 秀太郎

強烈な思い出ツートップ

中学時代の私の憧れは東欧だった。スメタナの交響詩『モルダウ』川が流れるチェコのプラハや、モンテリオール五輪女子体操で10点満点を連発した天才コマネチの国ルーマニアが東欧、というごく単純な理由だった。が、人生初の一人旅に出た16歳の私が最初に踏んだ異国の地面はパリだった。1979年。東西冷戦下の当時、鉄のカーテンの向こう側を何のこねもない高校生が旅するのは“無理”というわけで、牛乳配達をして貯金し実現した旅は、西欧8カ国23日間の鉄道旅だった。

モスクワ経由のソ連アエロフロート機の発券代理店に勧められ、到着する晩のホテルだけは予約した。場所はセーヌ左岸モンパルナス。ホ

テル名も位置も忘れたが、ド・ゴール空港から近郊鉄道、メトロを乗り継ぎ、最後がバス。メトロの階段を上って、初めて夜のパリの地面を踏んだ瞬間の興奮戦慄^{せんりつ}は、45年たった今でもはっきりとよみがえる。

翌朝まだ極寒の3月、続くパリ2泊のホテル探しに歩いた。モンパルナスからリュクサンブール公園にかけて、ガイドブックとHOTELの看板を頼りに探したのだが、お目当ての1つ星ホテルはどこも「complet = 満員」の札が扉にあるかフロントでそう言われるか。これが私がmerciの次に覚えたフランス語だ。そして、とうとう空き室があった64 Rue Gay-Lussacの1つ星ホテルが思い出の宿となった。今でもパリに行くと、時間に余裕がある時はついその通りとホテルに足が向く。ホテルの名前は数年おきに変わっているが、カルチェ・ラタンからモンパルナスにかけてのセーヌ左岸の風景はそのままだ。そのホテルで思い出すのは、夜中に廊下の突き当たりの共用トイレに行ったら、使用中に時限式の照明が消えてしまい、真っ暗闇の中、

パリ市街図



64 Rue Gay-Lussac